

サンタさんの孫

ポーキュパイン

またひとつ、ティーナはため息をつきました。窓の外はまだ何も乗せていないケーキの上。でも、一週間もしないうちに、真っ白な雪の上は大きなソリでいっぱいになることでしょう。そのソリを一つ一つ思い浮かべるたび、ため息が小さな口から漏れるのです。

「つまらないわ。今年のクリスマスもおじいさまはいらっしゃらないわ」

ティーナはサンタさんの孫でした。世界中の子どもたちが家族と温かなテーブルを囲むなか、ティーナのおじいさんは家族に見送られつつ星空へ。ティーナはクリスマスを家族揃って迎えたことはありませんでした。ティーナには、そのことが残念でならないのです。

◇◇◇

それは他のサンタさんの孫たちも同じこと。それぞれ小さなトナカイを連れて集まりました。銀色におめかししたモミの木が空に向かってキラキラ伸びる、彼らだけのとおき場所でした。

凛々しい眉のマーティーが言いました。

「今年こそは、おじいさまとクリスマスを過ごしたいと思うんだ」

「私もよ！今日はそのことを話したいと思っていたの」

リーチャが黒い目を輝かせました。

「でも、家に引き止めるなんてできないよ」

「私たちは嬉しいけど、プレゼントを待っている子どもたちは悲しいわ」

秀でた額に落ちる細い髪を、クリストハルトは中指でそっと払いのけました。ジェルソミーナは寒そうに膝をすり寄せます。

ずっとこの森に暮らしているのはティーナの家族だけなのです。それぞれが配るプレゼントを分けるため、この時期になるとみんなは家族と共に遠い国からはるばるやって来るのです。

アンリが鼻を鳴らして言いました。

「違うよ、僕たちが行くんだよ」

みんながアンリの方を向きました。ティーナには、その小さな頭一つ一つに、大きなハテナが浮かんでいるのが見えるようでした。

ねえアンリ。それは、私たちがソリに乗るってこと？煙突から煙突へ、夜空をかけるってことかしら？

ティーナはパンと手を叩きました。なんて素敵なアイデアでしょう！

「そうよ！クリスマスと一緒に過ごしたいのなら、おじいさまのソリに乗ってしまえばいいのよ！」

でも、サンタクロースのソリに乗ることは、お父さんからもお母さんからも固く禁じられています。ティーナといつも一緒にいるトナカイのリュリュとは違って、ソリを引っぱるトナカイたちはずんぐりと大きく力も強く、とても子どもに操れるものではないのです。どんな鳥もねぐらに引っこんでしまう冷たい夜の空を飛び回るだなんて、もちろんティーナたちはやったことはありませんでした。

それなら、とマーティーがにっこり笑いました。

「袋の中に入るのはどうだろう。プレゼントのふりをするんだ」

プレゼントを入れる袋は、子どもたちにはすっかり見慣れたものでした。頭からかぶって、オバケごっこをしたこともありました。あの袋の中で息をひそめてこっそり隠れたら、どんなにわくわくすることでしょう。みんなにはマーティーの案がたいそう良く思えたので、きらきらした顔を見合わせると口々に言いました。

「僕の家的小屋に使っていない袋があったはずだから、みんなの分を持ってくるよ。息ができるように穴も開けなきゃね」

「私は袋につめる綿を持ってくるわ。ソリはゴツゴツしているから、クッションが必要よ」

「袋から頭を出す時のために、あったかい赤の三角帽子を作るね。白い飾りを付ければ、星たちもおじいさまに黙っていてくれるはずさ」

「じゃあ私はジンジャークッキーをたくさん焼くわ。一晩中飛ぶのはお腹が空くわ」

アンリもリーチャも力持ちなので頼りになります。クリストハルトはお裁縫が得意ですし、ジェルソミーナは料理をするのが大好きです。

はて、私は何をしよう、とティーナは考えました。すると、足下で丸まっていたトナカイのリュリュが立ち上がり、その頬をペロリと舐めました。そうか、とティーナはリュリュと目配せして、大きな声で言いました。

「私、みんながうまくいくようにお祈りするわ。いいクリスマスになるように」

真っ白な森の奥の奥まで、太陽が黄金の道を落としていくのが見えました。冬がこんなに鮮やかに感じられたのは、みんなにとって初めてのことでした。

それから数日経ったころ、ティーナの元にクリストハルトのトナカイ、フィフィがやって来ました。背中の荷物を解くと、中にはティーナの名前が刺繍された三角帽子。てっぺんにボンボンが、フチには白いファーがあしらわれた赤い帽子はティーナの頭にぴったりで、かぶるとふんわり暖かいのでした。暖炉のそばで十分にくつろいだフィフィがマーティーの

家に向かうのを見送って、ティーナはベッドに入りました。あんたの出番は最後だもんね、とささやくと、待ちきれないと言うようにリュリュは細っこい角を振りました。

◇◇◇

クリスマス・イブの夜になりました。みんなの家を順繰りに回ってそのほっぺたを舐めたリュリュは、最後にティーナのほっぺたもペロリと舐め上げました。これできっと、万事うまくいくはずです。

家族の目を盗んで無事にアンリがくれた袋の中におさまったティーナを乗せて、ソリはシャンシャン賑やかに出発しました。リーチャが持ってきてくれた綿はやわらかく、乗り心地は抜群です。あっという間にお月さまのそばにやって来たソリは町にたどり着いて、煙突から煙突へ、次々にプレゼントを届けていきます。滑ったら楽しそうな急な屋根も、寝そべったら気持ち良さそうなゆるやかな屋根も、今はすっかり雪に覆われて白一色になっていたのです。町も森も、空の上も下もあんまり変わらないな、と袋から顔を出したティーナは思いました。

七つ目のとんがり屋根の家に入ってから、サンタさんはしばらく戻って来ませんでした。待っている間に取り出したジェルソミーナのジンジャークッキーは、とてもかわいらしくて食べるのがもったいない程でしたが、かじってみるとそれは大変おいしくて、ティーナはあっという間に平らげてしまいました。そして、すっかりお腹が満たされたティーナは綿でいっぱいの中袋の中で丸まると、あくびを一つして眠りこんでしまったのです。

さて、煙突からとんがり屋根の家に入ったサンタさんは、男の子が欲しがっていた世界地図を枕元に置いた時に、リボンでくくられた袋があるのを見つけました。「サンタさんへ」と大きな字で書かれたそれを開いてみると、ところどころほつれたカラフルなマフラーがこちらを覗いていました。赤い頬をますます赤くして、いそいそと首に巻こうとしたサンタさんでしたが、たっぷりとした白いお髭でマフラーの丈が足りません。仕方なく丁寧に畳みなおしてソリの後ろに置いた時、ゆっくりと上下する奇妙な袋を見つけました。不思議に思って開けてみれば、中で孫娘のティーナがスヤスヤ寝ているではありませんか。

「これはこれは、なんて素敵なおクリスマスプレゼントだろう！」

手にしたマフラーを細い首に巻いてやると、サンタさんは再び空高くソリを走らせました。星々がチカチカと目配せしあう、静かなクリスマスの夜のことでした。